こうしたなか、何香凝は1924年1月、広州で開催された国民党第1回全国代表大会席上で、「法律上、経済上、教育上、社会上の男女平等の原則を確認し、女性の権利の発展を図ること」を提案し、採択を受けている。孫文死去（1925）の直後、夫の廖仲恺が右派により暗殺されるが、26年の第2回大会では、宋慶齡（孫文未亡人）、鄧穎超とともに何香凝は3名連名で「婦女運動決議案」を提出。これは1949年に至るまで、国民党、共産党の婦女運動の共同方針となる——というのが、現在の中国共産党の公式見解。27年には、蒋介石政権の一切の職を辞し、英仏に遊学して画業に勤しむが、31年にパリより帰国、上海で「時局に関する意見」を発表し、以降「抗日運動・救国救亡に奔走」することとなる。

家族が国民党右派の迫害に晒され、蒋介石と決裂したことが、中華人民共和国成立以降の何香凝の栄達に貢献したことは疑えまい。